

三石アイヌの集落と集落群, 1856~69年

—流動的集団の形成—

遠藤 匡 俊*

Inter-settlement Movement of the Ainu Households and
Settlement Groups in the Mitsuishi District of
Hokkaido, Japan, 1856~69

Masatoshi ENDO*

I. はじめに

従来、江戸時代のアイヌは主に漁撈・狩猟・採集活動によって生計を営み、一定の居住地から季節的移動をしていたと考えられてきた。しかし、必ずしも一定の居住地からの季節的移動ではなく、各家は集落間で居住地そのものを移していた事実が見い出されつつある(遠藤 1985, 1987a, b)。つまり、集落の位置が一定しているか否かに関わらず、集落の構成家は変動しており、流動的な居住集団であったことが明らかになりつつある。集団の流動性は、現存する狩猟・採集社会の特徴として報告されており(LEE and DEVORE 1968)、ここに、現存の狩猟・採集民と江戸時代のアイヌとの接点が確認されたことになる(遠藤 1988)。

しかしながら、集落間移動の出発地と到着地に関する具体的なデータを欠くために、どの家のいかなる移動によって集落の構成家が流動的に変化していたのかが、必ずしも明確ではなかった。

本稿の目的は、江戸末期の三石場所における家の集落間移動の移動経路を復元し、集落と集落群の関係について考察することである。

II. 史料と方法

1. 史料

分析に用いた入手可能な現存の史料は、安政3

* 岩手大学教育学部地理学教室
Department of Geography, Iwate University

(1856)年と安政5(1858)年の「松浦武四郎文書」(国文学研究資料館史料館蔵)、元治1(1864)年と慶応1(1865)年の「町史編纂資料」¹⁾(三石町郷土館蔵)、慶応4(1868)年の「ミツイン御場所土人別名家数書上」(静内町郷土館蔵)、明治2(1869)年の「三石・浦川両郡諸調」(北海道立文書館蔵)である。元治1(1864)年と慶応1(1865)年の史料には戸主名のみが集落ごとに記され、安政3(1856)年の史料には戸主名と家族員数が、安政5(1858)年、慶応4(1868)年、明治2(1869)年の史料には全員の名前・年齢・親族名称等が集落ごとに記されている。

2. 方法

以上の史料に記されている集落単位の戸主名を年次を変えて照合することによって、家の集落間移動を把握した。例えば、安政3(1856)年にA集落に記された者が安政5(1858)年にはB集落に確認された時に、その家はA集落からB集落へ移動したものと判断した。なお、家とは最小の社会集団として史料に記されている単位であり、多くは戸主夫婦とその未婚の子女から構成される、食・住を共にする生活単位と考えられる。

III. 集落の構成家の変化

1. 集落の構成家

三石場所の中を三石川・^{みついし}梟舞川・^{きりまい}布辻川の3河川がほぼ平行して流れており、集落は主に三石川と梟舞川流域に分布していた(図1)。集落は、毎年繰り返される季節的・出稼的移動²⁾の基点と

なる。このような季節的・出稼の移動のほかに、安政3(1856)年から明治2(1869)年にかけての三石アイヌは、集落間で居住地そのものを移す移動も行っていた。そのために、安政3(1856)年から明治2(1869)年にかけての6カ年次のなかで、常に居住者が確認された集落は3例にすぎず、1回しか居住者が確認されなかった一時的な集落は15例もみられた(表1)。

集落の戸数規模は、最低時で1戸、最高時で20戸、平均5.5戸であり、人口は、最低時で2人、最高時で79人、平均22.7人である。便宜上、安政3(1856)年の13の集落と49戸の家を次のように表記する。すなわち、13集落は、へハウ集落(A)、カムイコタン集落(B)、ヌフシュツ集落(C)……ケリマフ集落(L)、トクロシャモ集落(M)とする。49戸の家は、へハウ集落(A)の11戸をA1, A2……A11とし、カムイコタン集落(B)の10戸をB1, B2……B10とし、以下同様にして、トクロシャモ集落(M)の3戸をM1, M2, M3とする。

2. へハウ集落の居住家の変化

安政3(1856)年の三石川中流部におけるへハウ集落(A)の戸数は11戸[A1, A2……A11]であったが、安政5(1858)年には4戸[C6, D1, D2, F2]となった(図2)。これは、11戸[A1, A2……A11]は全て他集落へ移動し、代わりに、ヌフシュツ集落(C)から1戸[C6]、オハフ集落(D)から2戸[D1, D2]、テコシ集落(F)から1戸[F2]が移動してきたためである。元治1(1864)年のへハウ集落(A)は4戸[C6, C6', D1, D2]となった。これは、1戸[F2]がミツイシ集落(N)へ移動し、代わりに、カムイコタン集落(B)から1戸[C6']が移動してきたためである。慶応1(1865)年の構成家は元治1(1864)年と同じである。

しかし、慶応4(1868)年には10戸[B2, B2', B4', B5, B10, C6, D1, D2, F1, F1']となった。これは、カムイコタン集落(B)から4戸[B2, B2', B5, F1]、ルベシベ集落(P)から1戸[B4']、ホロケナシ集落(W)から1戸[B10]がそれぞれ移動してきたほかに、新戸が1戸[F1']形成されたためである³⁾。明治2(1869)

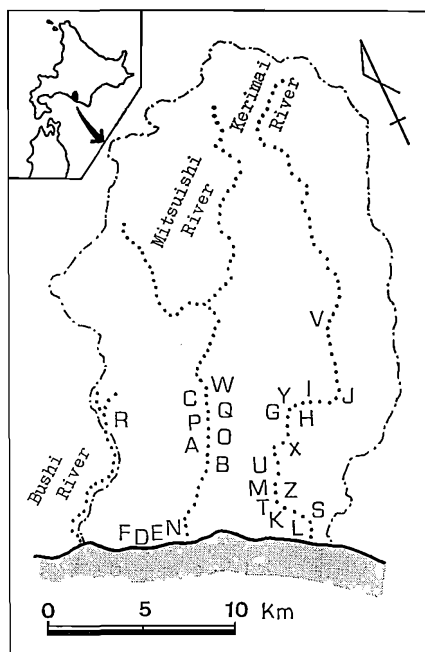


図1 研究対象地域

A~Zは、安政3(1856)、安政5(1858)、元治1(1864)、慶応1(1865)、慶応4(1868)、明治2(1869)年のなかで最低1カ年次でも居住者を有した集落を示す。

A. へハウ、B. カムイコタン、C. ヌフシュツ、D. オハフ、E. コイトイ、F. テコシ、G. ウェンネツ、H. シュモ、I. クト、J. ショナイ、K. ハシネツ、L. ケリマフ、M. トクロシャモ、N. ミツイシ、O. シシャモナイ、P. ルベシベ、Q. キムンコタン、R. ブッシ、S. ワッカベツ、T. シュモロ、U. タフカルニキ、V. モヒラ、W. ホロケナシ、X. トヨケナシ、Y. ホンキリ、Z. ニノミカルイシ。

年の構成家は慶応4(1868)年と同じである。

このように、へハウ集落(A)の居住者は、様々な集落から移動してきた家の一時的な集合であり、かなり変化していたことがわかる。これは、へハウ集落(A)以外の他の集落にもあてはまる。

3. へハウ集落の居住家の移動先

へハウ集落(A)の戸数は、安政3(1856)年に11戸[A1, A2……A11]であった。この11戸に着目⁴⁾して、その後の居住集落を追跡する(図3)。安政5(1858)年までの間に11戸の家が全て他集

表 1 居住者が確認される年次数別にみた集落数

居住者が確認される年次数	集落数	集 落
1	15	D, E, F, G, H, I, J, K, M, O, Q, R, U, V, Z
2	0	
3	3	C, S, T
4	3	W, X, Y
5	2	N, P
6	3	A, B, L
計	26	

「松浦武四郎文書」, 「町史編纂資料」, 「ミツイシ御場所土人別名家数書上」, 「三石・浦川両郡諸調」により作成。他の図表も同様。

安政3 (1856)	安政5 (1858)	元治1 (1864)	慶応1 (1865)	慶応4 (1868)	明治2 (1869)
A1—P	C—C6	C6	C6	B—B2	B2
A2—B	D—D1	B—C6'	C6'—?	B—B2'	B2'
A3—O	D—D2	D1	D1	P—B4'	B4'
A4—P	F—F2—N	D2	D2	B—B5	B5
A5—P				W—B10	B10
A6—P				C6	C6
A7—P				D1	D1
A8—O				D2	D2
A9—P				B—F1	F1
A10—P				F1'	F1'

図 2 ヘハウ集落の構成家の変化
A1, A2, B2, F1 等は家,
P, B, O 等は集落を示す。

落へ移動した。すなわち、ルベシベ集落 (P) へ7戸 [A1, A4, A5, A6, A7, A9, A10] が移動し、シシャモナイ集落 (O) へ2戸 [A3, A8], カムイコタン集落 (B) へ1戸 [A2], タフカルニキ集落 (U) へ1戸 [A11] が移動した。こうして、安政3 (1856) 年にヘハウ集落 (A) に共住した11戸は、安政5 (1858) 年には4集落 (P, O, B, U) に分住したことになる。

元治1 (1864) 年には、シシャモナイ集落 (O) から2戸 [A3, A8] がルベシベ集落 (P) へ移動し、ルベシベ集落 (P) から2戸 [A4, A7] がホロケナシ集落 (W) へ⁵⁾、タフカルニキ集落 (U) から1戸 [A11] がホンキリ集落 (Y) へ移動し

た。こうして、元治1 (1864) 年には4集落 (P, B, W, Y) に分住したことになる。慶応1 (1865) 年には、カムイコタン集落 (B) から1戸 [A2] がホロケナシ集落 (W) へ移動して、2集落 (P, W) に居住した。しかし、慶応4 (1868) 年には、ルベシベ集落 (P) から4戸 [A1, A3, A5, A9] がヌフシュツ集落 (C) へ、1戸 [A6] がホロケナシ集落 (W) へ移動し、再び4集落 (P, C, W, Y) に分住した。そして、明治2 (1869) 年には、ヌフシュツ集落 (C) から1戸 [A5] がホロケナシ集落 (W) へ移動して、3集落 (C, W, Y) に分住したことになる。

このように、安政3 (1856) 年にヘハウ集落

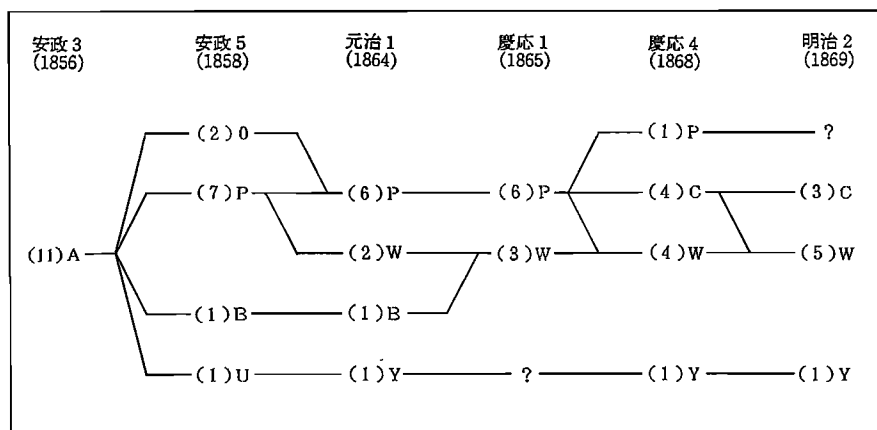


図3 安政3(1856)年にへハウ集落に居住した11戸の移動先
ただし、安政5(1858)年にルベシベ集落(P)に居住した1戸は、それ以後の居住集落は不明である。

表2 同一単位の居住集落

家	居 住 集 落					
	安政3 (1856)	安政5 (1858)	元治1 (1864)	慶応1 (1865)	慶応4 (1868)	明治2 (1869)
A1, A9	A	P	P	P	C	C
B2, B5	B	B	B	B	A	A
B3, B6	B	O	P	P	W	W
C1, C7	C	Q	W	W	W	W
D1, D2	D	A	A	A	A	A

(A)に居住した11戸は、それ以後は必ずしも居住集落を共にはしなかった。これは、へハウ集落(A)以外の他の集落の居住者にもあてはまる。

4. 集落構成家の流動的变化

安政3(1856)年にへハウ集落(A)に居住した11戸[A1, A2...A11]のなかで、全期間中に、あたかも同一の家のように移動・定着行為を共にしたのは2戸[A1, A9]のみであった。A1とA9の2戸は、安政3(1856)年にへハウ集落(A)に居住し、安政5(1858)年・元治1(1864)年・慶応1(1865)年にはルベシベ集落(P)に居住し、慶応4(1868)年・明治2(1869)年にはヌフシュツ集落(C)に居住した。すなわち、A1とA9の2戸は、全期間中に2回居住地を他集落へ移したが、常に居住集落を共にしていた。

次に、安政3(1856)年から明治2(1869)年までの計6カ年次すべての居住集落が確認できる

43戸に着目する。このとき、全期間中に1回移動した家は7戸、2回移動した家は25戸、3回移動した家は10戸であり、1回も移動しなかった家は1戸にすぎない。全期間中に移動・定着行為を常に共にした家集団の最大戸数は2戸であり(遠藤1985)、それは、A1-A9, B2-B5, B3-B6, C1-C7, D1-D2の5例にすぎない(表2)。すなわち、多くの家は単独で定着し、移動していたことになり、全期間を通して、集落の構成家は固定せず、流動的であったことがわかる。

IV. 移動経路の復元

安政3(1856)年・安政5(1858)年・元治1(1864)年・慶応1(1865)年・慶応4(1868)年・明治2(1869)年の6カ年次のなかで、1カ年次でも居住者を有した地名は26カ所であり、その位置を示したものが図1である。この全集落を

河川の流れて模式的に示し、各家の集落間移動経路を示したものが図4である。

安政3(1856)年から安政5(1858)年にかけては、三石川流域では中流部のルベシベ集落(P)、シシャモナイ集落(O)およびへハウ集落(A)へ向かう移動が多く、鳥舞川流域では下流部のシュモロ集落(T)、ワッカンベツ集落(S)およびケリマフ集落(L)へ向かう移動が多かった。安政5(1858)年以後は、三石川流域では最も上流部に位置するホロケナシ集落(W)へ向かう移動が多く、鳥舞川流域では中流部のホンキリ

集落(Y)へ向かう移動が多くなる。

このように、集落間移動の範囲はほぼ同一河川流域内に限られていた。その同一河川流域内においては、上流部から下流部へ向かう移動あるいは下流部から上流部へ向かう移動がみられ、移動範囲が同一河川流域内で更に細分化される傾向(例えば、上流地区と下流地区)は特に認められなかった。これは、集落間における家の交換によって、個々の集落が、同一河川流域内の集落群と密接なつながりをもっていたことを意味する。

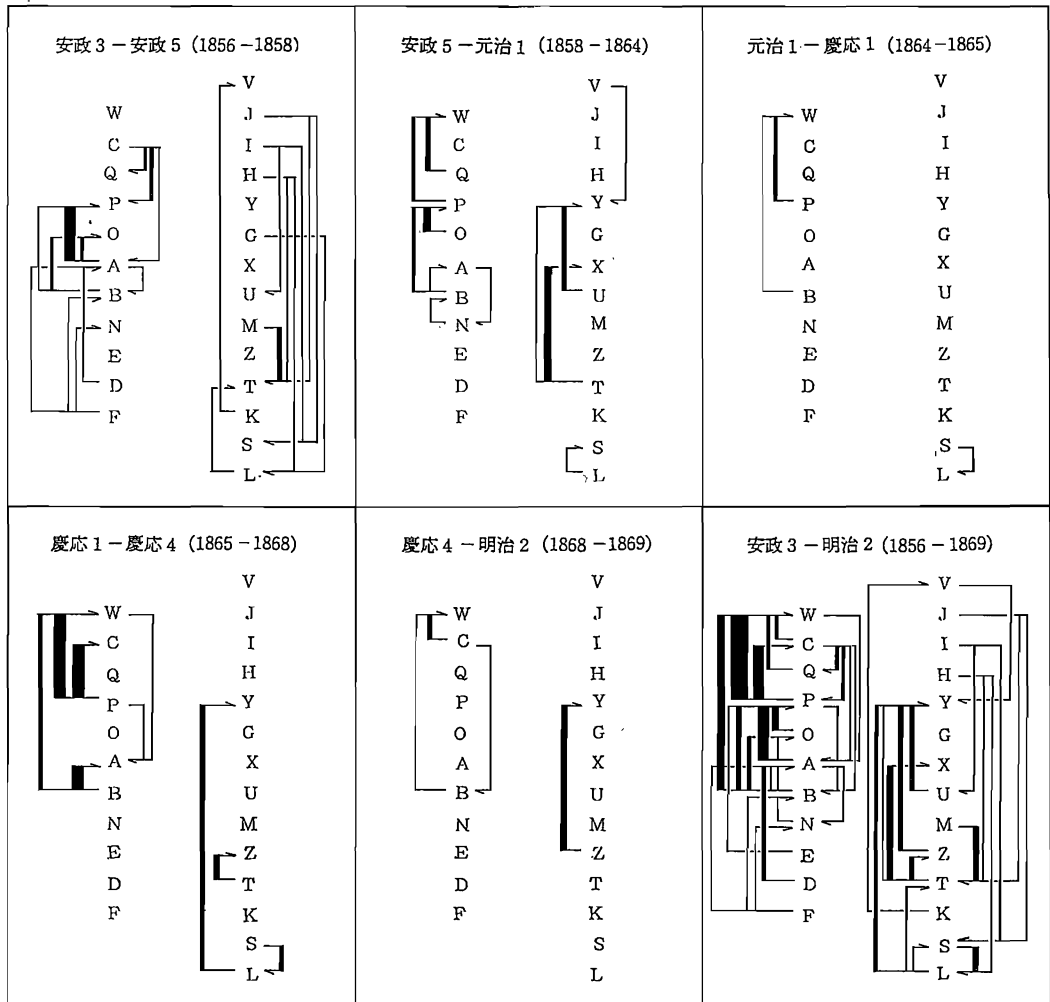


図 4-a 同一河川流域内における家の集落間移動

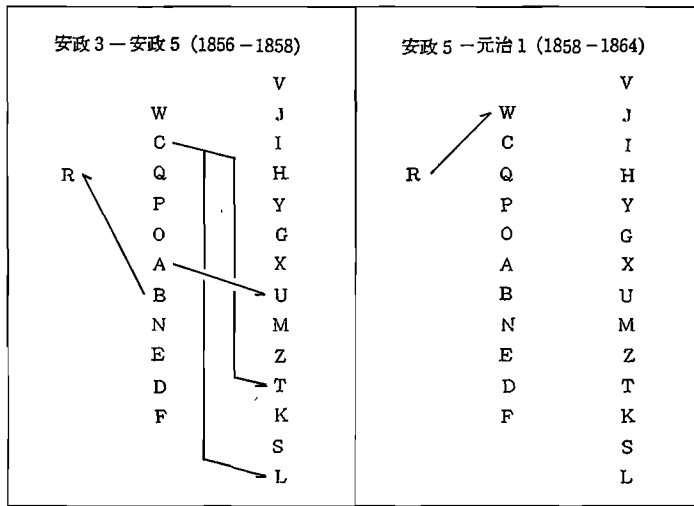


図 4-b 流域間における家の集落間移動

V. 社会単位としての集落群

ここで、集落周辺の環境（空間）が、その居住集団の漁撈・狩猟・採集活動に利用される、と仮定する。この仮定の下では、集落間移動が生じた場合には、移動先の集落周辺の環境（空間）が利用されることになる。すなわち、流動的変化といえるほど頻繁に集落間移動が生じる場合には、各家の構成員が利用する環境（空間）も頻繁に変化することになる。したがって、空間利用という観点から把える限り、個々の集落が社会単位として意味をもつのは一時的であり、長期的には、家の交換を行なう集落群全体が社会単位として重要となってくるものと考えられる。

以上のことは、狩猟・採集段階にあった人類史の初期における集落は、必ずしも他の集落から互いに孤立したものではなかった可能性があることを意味する。

本研究では、昭和62・平成1年度文部省科学研究費一般研究C「松前蝦夷地における集落立地に関する研究」（課題番号 62580186，研究代表者羽田野正隆）を使用した。

注

- 1) 「町史編纂資料」（三石町郷土館蔵）には慶応4（1868）年の人別帳（戸主名のみ

記載）が含まれる。その内容は同じく慶応4（1868）年の「ミツイシ御場所土人別名前家数書上」（静内町郷土館蔵）とは矛盾しない。

- 2) 本稿では、季節的とは1年以内という期間を意味し、出稼的とは基点となる特定地を發し、再び基点に戻る移動を意味する。
- 3) C6'家の慶応4（1868）年、明治2（1969）年の居住集落は不明である。
- 4) この11戸から新たに形成された新戸に関する記述は略す。
- 5) A10家の元治1（1864）年の居住集落は不明である。

文 献

遠藤匡俊（1985）：アイヌの移動と居住集団—江戸末期の東蝦夷地を例に一。地理学評論，58，771-788。
 —（1987a）：江戸末期の三石アイヌにおける流動的集団の形成メカニズム。地理学評論，60，287-300。
 —（1987b）：アイヌの移動形態を復元する方法について—地図と地名を用いて—。地図，25-4，18-24。
 —（1988）：流動的集団の集落地理学的考察。地理，33-9，95-99。
 LEE, R. B. and DEVORE, I. (1968): *Man the Hunter*. Aldine Publishing Company, Chicago, 415p.
 (1989年8月24日受付, 1989年11月20日受理)